

とにかく行動すること。 それが道を切り開く第一歩になる。

九州大学で過ごした学生時代、理化学研究所でのポストドク時代と、アカデミアに籍をおいていた韓愛善さん。任期満了を期に、東レ株式会社 先端材料研究所に活躍の場を移して2年が経つ。コンタクトレンズの開発や、潰瘍性大腸炎の際に用いられる白血球除去カラムの開発など、理研時代とは全く異なる分野の仕事をめいっぱい楽しんでいる。

先端材料研究所
韓 愛善さん
東レ株式会社 研究員

Profile
中央民族大学工学部生物化学工程学科卒業後、九州大学大学院システム生命科学府システム生命科学専攻にて博士号取得。2003年から2006年までの3年間日本学術振興会特別研究員として研究に従事。2006年より理研入所。前田バイオ工学研究室にて協力研究員、基礎科学特別研究員を経て2011年4月より東レ(株)に入社。



やっぱり最初はアカデミアから

ずっとアカデミアにしていると、みんな大学に就職したいと思うものだと思います。私も理研の次のポストをアカデミアでの研究職優先で探していました。友達も多く、便利な都会を離れなくなかったので、最初は東京のみで就職先を考えていました。

JREC-IN等も活用しながら、自分の専門の分析に関わるパーマネントなポストを探していたんです。大学のポストは10ヶ所以上応募したけど、それでもやっぱり難しかった。少しずつエリアを拡大していき、最後は日本を離れて中国やアメリカでも職を探すつもりだったんです。アカデミアでの就職が難しいと感じ始めた頃、活躍の場所を広げるために企業も考えはじめまし

た。そのときには人材紹介会社の転職サイトにも登録していました。

自らポストを作り出せ

今の会社とは、指導教官が主催する研究会で出会いました。企業に入ればある程度の安定はあるし、製品を作る部分に携わるのも面白いかなと思って、懇親会で指導教

官に紹介してもらったのです。そこで「私は企業に入ってもバリバリ働けますよ!」とかなり自分を売り込みました。それが功を奏したのか、面談の機会をいただき、最終的に採用してもらうことができました。

転職活動をしてみてわかったことが2つあります。1つは思っている以上に表に出てきていない求人があるということ。私も懇親会で話しかけたからこそ、今のポストに出会うことができました。これから転職活動を行うのであればとにかく行動して、

知らないことがあっても大丈夫、
働きながら成長していける
機会はきつとある

自分を売り込むことが絶対に必要です。もう1つが、企業にもポストの採用が多くあることですね。東レの中でも商品になる前の基礎研究をしている部署があり、そこには博士号取得者がたくさんいます。企業での活躍の場所は博士にも用意されているんです。

転職活動をするなら、人脈づくりが大事ですね。理研では小さなセミナーや勉強会、それにあわせて懇親会などがたくさん開かれています。1人では勇気がいらしますが、先生方が参加されるのであれば是非一緒に参加してみてください。私のような出会いが待っているかもしれません。

これまで積み上げてきたものすべてを活かして

企業は働いたことのない環境ですし、自分の研究テーマにあったところに行かなければと思い込んでしまっていたので「企業

に行くのは難しいな」と勝手に可能性を狭めていました。でも、実際に入ってみると、何のテーマを研究してきたかはあまり関係ないことに気づきます。これまで積み上げてきたものすべてが自分なので、それを活かせる場面は結構あると感じています。知らないことが多いのは当然ですが、企業ではそれを学ぶこともできます。必要に応じて特許について学ぶ研修や、エクセルの研修などもあるし、これからリーダーという立場に就く人のためには、マネジメントや

リーダーシップなどの研修もあります。学びながら成長していけるから大丈夫、絶対に慣れていきます。

グローバル展開している企業であれば、活躍の場は日本にとどまらず、無限に広がって行きます。私は、中国に2人子供がいますので、いずれは中国に戻りたいと考えていました。そういう意味でも、今の職場は自分の思いとマッチしていますし、就職先として企業を選択して、本当に良かったと思っています。

世の中にインパクトを与える 実感のある仕事です

韓さんの事例からもわかるように、企業での活動において専門性は必須ですが、その上で重要なのが行動力とコミュニケーション能力です。私たちの部署では、博士・ポスト経験者を採用することもしばしばありますが、例え専門分野がマッチしていなかったとしても、時間をかけて面接していく中で、「この人ならいける」と感じれば採用します。逆に、行動力が伴っていない場合には、事業とその方の専門分野がよほどマッチしていなければ、採用には至りません。理研という恵まれた環境にいる間から、周囲と連携をとり、新しい環境に向けた行動をとり続けることが、理想とする転職につながっていくのではないのでしょうか。

会社のなかでも、研究職や技術職から他の部署に異動になることはよくあります。多くの人達が、最初は「研究ができないから異動させられたのではないかな…」「もう、好きな研究ができない」と、悲観的に捉える傾向があります。でも、例えば生産の職種に携わった場合、そこで動かす物やお金のスケールは、研究室の比ではありません。瞬時に何億円という判断をしていくことになります。その魅力を知ってしまうと、もう研究に戻れない…なんて思う人も出てきます。ずっと同じ場所にいると、自分の可能性や、他の場所で活躍している自分の姿が想像しにくくなってしまいかもしれませんが、どんな仕事にも、そこに携わって得られる達成感が絶対にあるものです。もっと企業に目を向けてみると活躍の場は広がっていくはずですよ。企業では大きなプロジェクトに携わることで、関わる人数、予算規模が大きくなります。自分の研究が進捗すると、確実に何かものができるようになります。そして、それが世の中にかついでインパクトを与えることを実感できます。そのダイレクト感が企業で研究に携わる醍醐味かもしれません。



主席研究員
中村正孝さん
先端材料研究所
先端医療材料研究ユニット

リサーチフェロー
菅谷博之さん



ダイナミックなビジネスの展開にも物怖じせずに飛び込んでいく韓さんの意志の強さは、企業で求められる資質ですね。企業とアカデミアのギャップは仕事をする中で埋めていけるので恐れずにぶつかっていきましょう。